

2026 年度 高田峰夫担当 演習科目／卒業研究指導について

* 演習の授業方法

高田の担当する演習では、各期のテーマを決め、そのテーマに沿ったテキストを選定し、それを全員で輪読する形式で授業を進めます。各期のテーマの内容は、以下の記述を見てください。具体的な方法は、報告者 2 名がレジュメを準備し、報告者の報告を基に、疑問点等を出したうえで、出席者の間で議論を進める、というものです。ですから、何よりも受講者の積極的な参加が期待されます。(徐々に慣れるので、引っ込み思案の人、人見知りをする人も、心配せずに参加してみてください)。

各期の終わりには、その期のテーマに関連する新聞記事を自分で選び、その内容に関する議論を 8000 字のレポートにまとめて提出してもらいます。ただ、これはあくまでも卒論・卒研に向けての練習のようなもので、ゼミ本体の参加・実践の方が重要です。

卒論・卒研について高田の指導を希望する方は、2・3 年次で 1 年間（合計 2 期）、高田のゼミに参加したことがあることを条件とします。事情によっては、半期の履修でも参加を認める場合がありますが、その場合は個別に相談に来てください。以下のアドレスにメールをくれれば(takada-m@shudo-u.ac.jp)、日時を決めた上で面談を行います。なお、卒論・卒研の各自のテーマと 2・3 年次のゼミのテーマを連動させることはしていません。

個別の演習については、以下の説明を読んでください。

なお、取り上げる予定の文献は、あくまでも暫定的なものです。書籍の出版状況、在庫の変動等により、追加・削除もありえますので、了承してください。

* 演習科目の授業内容（予定。変更があり得ます）

注：科目名の後のカッコ書きの中は、年ごとの差別化のために記入してありますが、実際に取り上げるテーマは、それとはズレることが多いです。気にしないでください。

<前期：国際社会学演習 A（非西欧と脱西欧化）、木曜日 2 限>

1 年間を通じ、社会人のスキルと学び、をテーマにします。

前期は、大学までの学びの現状、特に読解力や言語技術の現状、それがもたらす社会での不適合について知ることから始めましょう。皆さんは、すでに社会学基礎講座で大学で 4 技能（読む、書く、聞く、話す）の必要性、大学生に求められる 4 技能のレベルについて学びました。しかし、なぜそれが社会人にとって重要か、現在の社会で求められているレベルとはどのようなものか、恐らく十分に理解したとは言えないのではないのでしょうか。前期は、読解力の現状について詳しく知ることから始めましょう。

[文献]

新井紀子『シン読解力』東洋経済新報社

三森ゆりか『ビジネスパーソンのための「言語技術」超入門』中公新書ラクレ

山口拓郎『読解力は最強の知性である』SB クリエイティブ

野々村健一『問いかけが仕事を創る』角川新書

<後期：国際社会学演習 B（国際システムと国民国家）、木曜日 2 限>

1 年間を通じ、社会人のスキルと学び、をテーマにします。

後期は、読解力をベースとして仕事で求められるスキル、具体的な学びの在り方、その多様性、応用、等について知ることから始めます。その上で、可能であれば、具体的な事例の検討、さらには実践にまでつなげられるなら望ましいのですが（なかなか難しいかも）

[文献]

三浦慶介『AI 時代に仕事と呼べるもの』東洋経済新報社

安川新一郎『BRAIN WORKOUT ブレイン・ワークアウト 人工知能(AI)と共存するための人間知性(HI)の鍛え方』KADOKAWA

吉田 新一郎『「学び」で組織は成長する』光文社新書

堀公俊『ビジネススキル図鑑』日経 BP

HR インスティテュート『全員転職時代のポータブルスキル大全』KADOKAWA

山口周『知的戦闘力を高める 独学の技法』日経ビジネス人文庫

<前期：エリア・スタディーズ演習、金曜日 2 限>

エリア・スタディーズ演習とボーダー・スタディーズ演習、両方を通じたテーマは「労働をめぐる急激な変化と別の道」です。かつて日本が「一億総中流」と言われた時代がありましたが、それは過去のものとなり、しばらく前から「中流崩壊」が叫ばれています。その中で労働も変化し、それと同時に働き方も変化しています。まずはその現状を見ることから始めましょう。

[文献]

NHK スペシャル取材班『中流危機』講談社現代新書

藤井薫『ジョブ型人事の道しるべ』中公新書ラクレ

柳川範之『40 歳からの会社に頼らない働き方』ちくま新書

加藤雅俊『スタートアップとは何か』岩波新書

<後期：ボーダー・スタディーズ演習、金曜日2限>

すでに 2025 年度の演習では農とナリワイの可能性について学びました。しかし、いわゆる「普通の」コース（就活をして会社に就職する、公務員を含む）とは別の働き方には、実はもっと多様なものがあります。後期は、その中からフリーランス、面識経済、協同労働などの新しい動きと可能性に考えてみたいと思います。

[文献]

雨宮処凛『25 年間、フリーランスで食べてます』河出新書

山崎亮『面識経済』光文社

工藤律子『働くことの小さな革命 ルポ 日本の「社会的連帯経済」』集英社新書

広井良典編著『協同で仕事をおこす』コモンズ

<卒論・卒研の指導、方法>

具体的な指導方法は、個別の指導もしますが、基本は卒論・卒研クラス履修者全員が集まり、ほぼ毎週議論を行うことをベースにします。参加者全員が集まり、順番に報告する。その内容に対して他の参加者が疑問点を投げかけ、批判的検討を行い、それらを受けて報告者が内容を修正していく、という形が中心です。理想は、高田がそれを聞きつつも、最後にコメントを加える程度にとどめ、出席者たちだけで自律的な議論が行えることです。社会人になる前の最終段階ですから、いつまでも誰かに「教えてもらう」のではなく、自分たち「自ら」が問いを立て、その問いに取り組み、解決の方向に歩む、というプロセスが望ましいわけです。集まりの開催曜日・時間は、4 月になり履修者が確定した段階で、参加者全員と高田の都合をすり合わせて決定します。